
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 371 号

—環境・農業・食べ物など情報の交流誌—

2014.11.06 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

<http://www.yamazaki-i.org>

*****発行部数 1063 部*****

□ 目次 □-----

<巻頭言> 「TPP 等情報開示促進法案」の行方 小泉浩郎

<山崎農業研究所総会記念フォーラム(速報)>

テーマ: 山崎記念農業賞受賞者に学ぶ

日時: 2014 年 7 月 26 日(土) 13:00~17:00

2. 在来品種を磨く……野口種苗研究所代表・野口 勲氏

<書評>

古野隆雄著『農業は脳業である』(コモンズ刊、2014 年) 益永八尋

<お知らせ 1> 山崎農研編「平成のマドンナ」シリーズ No.8 完成しました

<お知らせ 2> 山崎農業研究所所報『耕 No.132』発行されました

<編集後記> 汚れた民主主義と多数派の横暴にどう抗するか

<巻頭言> 「TPP 等情報開示促進法案」の行方

国会に提出されている法案で気になる 2 本の法案がある。カジノ法案（{特定複合観光施設区域の整備の推進に関する法律案} = 2013/12、超党派のカジノ議員連盟手出）と情報開示法案（「TPP 等情報開示促進法案」 = 2014/4、野党 5 党提出）である。

ギャンブルを推進し経済効果を得ようというカジノ法案と国の主権を失いかねない TPP の情報公開を求める情報開示法案とどちらが大事か。

カジノ法案は、今臨時国会で成立の公算が大きいと報道されてきた。一方、情報開示法案は、先の通常国会で内閣委員会に付託されたが全く審議されない。この臨時国会では、真っ先に審議されるものと期待していた。

カジノ法案は、女性閣僚 2 人の辞任劇に代表される政治とカネのゴタゴタで成立が危ぶまれていると多くの報道がある。だが、多くの国民が望んでいる情報開示法案の行方は全く分からない。法案提出の翌日、大手メディアは大きく取り上げたがその後の報道は全くない。何よりの共同提案した野党 5 党の説明責任は大きい。

TPP 交渉バスは、交渉妥結の糸口が見えないまま迷走しているかのように見えるが、11 月妥結に向けこのところ急にアクセルを踏み込んでいる。10 月 10 日～15 日日米実務者協議、19 日首脳交渉官会合（豪州キャンベラ）10 月 25 日～27 日閣僚会合（豪州シドニー）、11 月 8 日閣僚会合（中国北京）、そして 10 日～11 日アジア太平洋経済協力会議（APEC）首脳会議（中国北京）に前後して TPP 首脳会合（予測）と続く。

日豪 EPA 協定の承認案は、多くの問題を抱えながら衆院の外務委員会、財務金融委員会で可決された（10/29）。TPP12 カ国妥結案が出てからでは遅い。国民への情報開示を大きなうねりとするためには、まず、この「TPP 等情報開示促進法案」の行方を国民各層からただすことではないか。

小泉浩郎

山崎農業研究所所長

yamazaki@yamazaki-i.org

<山崎農業研究所総会記念フォーラム（速報）>

日時：2014 年 7 月 26 日（土）13:00～17:00

場所：東京都新宿 2 丁目 19-1 ビッグスビル B21 会議室

テーマ：山崎記念農業賞受賞者に学ぶ

1. 経過と評価……事務局長・小泉浩郎氏
 2. 在来品種を磨く
（第 33 回（2008 年）受賞）野口種苗研究所代表・野口 勲氏
 3. 家族農業経営を守る
（第 13 回（1987 年）受賞）元船橋農産物物産センター・斉藤敏之氏
 4. 耕してこそ農業
（第 36 回（2012 年）受賞）福島県有機農業ネットワーク理事・大河原 海氏
-

2. 在来品種を磨く……野口種苗研究所代表・野口 勲氏

現在、わが国の品種を見ると、その殆どが F1（雑種第 1 代）で雄性不稔を利用して大量生産されている。

流通側から見れば、雑種強勢を利用した F1 は、収穫量も多く形状も均一なので出荷規格に適合し、見栄えもよく農家側も有利販売に適している。そのことから、現在、固定種の種子の販売は殆どない。

F1 から採種した F2（雑種二代）は、メンデルの法則から形質は分離してしまうので、毎年、種苗会社から F1 種を購入しなければならない。

私は、F1 野菜そのものに反対しているわけではない。問題は本来の野菜の多様な品種がなくなって、すべてが規格化されて、生物の本来の姿が保たれなくなるのみならず、生物の多様性が壊されてしまうことだと思っている。それが大手種苗会社の利益のために独占される。企業による種子の独占は、在来種の遺伝子の有する優れた性質も亡ぼすという危機も生じる。

当社のメイン固定種「みやま小かぶ」がある。やや扁平で早生の「金町小かぶ」と腰高で中生の「樋の口かぶ」を自然交雑させ、豊円で玉割れ少なく均整とれた形状と緻密で甘味に富んだ肉質を目的に選抜固定した最高品質の小かぶである。

ミツバチは、自然受粉の運び屋である。このところ、ミツバチの大量死や突然姿を消す現象が問題となっている。生態系の変化や農薬説などが語られておるが、理由は分かっていない。

アメリカでも、ミツバチの集団・大量消滅を蜂群崩壊症候群（CCD）として問題となっている。2007 年全米で 240 万箱あった巣箱から 80 万箱ものミツバチが姿を消した。ミツバチは 100 万年前から進化は止まっているといわれているのに、このところ 1960 年代から 20 年周期で おこっている。私は、雄性不稔を利用した大面積の採種農場が蜂の生殖活動を狂わしのではないかと考えている。そのことを書いた本を過日安倍昭恵さん（総理夫人）に贈ったが、それがアメリカまで渡ったのか、アメリカはこの原因究明と対策に来年度 50 億円の予算を組んだと聞いている。

ミツバチを例にとったが、食べ物が身体や子孫を作ることは人も同じ、食の

安全・安心のために、今後の研究が必要と思う。

(文責：安富・田口)

<書評> 古野隆雄著『農業は脳業である』(コモンズ刊、2014年)

山崎農業研究所の会員である古野隆雄氏が2014年10月に「農業は脳業である」を出版した。著者は“合鴨水稲同時作”の農法を確立した百姓であり、第21回山崎記念農業賞(1996年)を受賞している。

この本は第1章から第7章までであり、目次は次のようになっている。

第1章 伝統農業、近代化農業、有機農業、第2章 苦節10年、第3章 失敗の数だけ人生は面白い、第4章 発想が勝負、第5章 合鴨君の教育力とシンクロナシティ、第6章 合鴨君、アジアへ飛翔、第7章 失敗の先にあるもの

著者の育った環境から「合鴨水稲同時作」農法の確立いたるまでの農業実践と農業人としての社会的活動がつづられている。そして、農業に対する考えや哲学、愛着心などが全体としてさりげなく記述されているので、読者も著者の考えに素直に納得、共感できる。

古野氏は、第7章において「百姓しながら学位論文を書く」という項を設けているように、著者は「百姓」という言葉が好きであり、愛着を持っていると思われる。私も、この百姓という言葉が好きである。というのも、私自身が百姓出身であるからである。現代においては、農業を生業としているか否かにかかわらず多くの人々は百姓という言葉を使っていない。

時代は明確ではないが、一昔前までは親から「百姓(農家)には学問はいらぬ」などと云われていたが、今日では、農学系学部とは限らず、大学(大学院)を卒業して農業(百姓)をする若者が多くなってきている。そのような状況にある中で出された今回の「農業は脳業である」は、これから農業を生業にすることを目指している若者にぜひ読んでもらいたい本である。

この本には、合鴨水稲同時作の技術的な説明やその農法確立に関する記述が多いが、その中に農業に対する基本的な考え方が述べられているので、畑作農家や畜産農家、果樹農家等を目指す若者のみならず、百姓を目指す若者にとつ

ては必読の本と云える。

今、日本の農業は TPP 交渉の影響で不透明感を増しつつある。TPP に参加した場合、農水省の調査でも、食料自給率が現在の 40%から 14%まで低下すると指摘している。自給率がこれだけ下がるということは多くの農家が農業を廃業し、他産業に移行せざるを得ないということであるが、果たして、転業先はあるのか。このような先行き不透明な農業を巡る状況の中にあって、希望を見出すことのできる本であると思われる。

古野氏の農業を支えたのは「安心安全な食料」を求めた多くの消費者が存在し、著者の考えや哲学に共鳴するだけでなく、援農に参加する消費者の支援があることも忘れてはならない。

益永八尋

山崎農業研究所会員

yamazaki@yamazaki-i.org

<お知らせ 1> 山崎農研編「平成のマドンナ」シリーズ No.8 完成しました

山崎農研編集「平成のマドンナ」シリーズ No.8(B5 版・30 ページ) が完成しました。既発行分も含め、電子版あるいは冊子で頒布しています。送料込み 500 円です。ご希望の方は yamazaki@yamazaki-i.org までご連絡ください。

(新刊)

No.8 家族経営協定でいきいき人生にトライ

栃木県那須塩原市

酪農・教育ファーム・レストラン 人見みゆ子さん

(阿久津加居聞き書き)

(既刊)

No.1 都市近郊に「オアシス牧場」を

埼玉県上尾市 榎本美津子さん (小井川敏子聞き書き)

No.2 世羅高原のそよ風になりたい

広島県世羅町 井上幸枝さん (後由美子聞き書き)

No.3 むらにまちにこどもたちにふるさとの味を伝えたい

- 鳥取県鳥取市 西山徳枝さん（小泉浩郎聞き書き）
- No.4 働きやすい作業環境の改善
徳島県 藍住地区のお母さん達（小林徳子聞き書き）
- No.5 「奥久慈の味」から広がる出会い
茨城県大子町 齊藤キヌ子さん（臼井雅子聞き書き）
- No.6 デパートに進出した農村女性
栃木県宇都宮市 アグリランドシティショップ（阿久津加居聞き書き）
- No.7 貧しさに学びこころ豊かに生きる
群馬県嬭恋村 丸山みち子（丸山みち子著）
- No.8 家族経営協定でいきいき人生にトライ
栃木県那須塩原市 人見きみ子さん（阿久津加居聞き書き）
- No.9 （近刊）月に手が届く山間農家に嫁いで
高知県土佐町 和田計美さん

<お知らせ 2> 山崎農業研究所所報『耕 No.132』発行されました

山崎農業研究所所報『耕 No.133』が発行されました。

ご希望の方には雑誌を頒布（頒価：1,000円）いたします。

yamazaki@yamazaki-i.org

までご連絡ください。

■山崎農業研究所 40 周年記念

山崎農業研究所を支える力ー 40 年を振り返って◎安富六郎

〈山崎イズムを現代に問う〉

- ・研究活動における山崎イズム◎田渕俊雄
- ・研究をもっと技術に生かすために◎多田 敦
- ・山崎不二夫先生の全人間的な研究実践に学ぶ◎熊澤喜久雄
- ・コンサルタントと研究所◎横澤 誠

〈研究所活動をめぐって〉

- ・現地に学び現地とともに◎小泉浩郎
- ・定例研究会について◎石川秀勇
- ・「耕」「電子耕」単行本を通じた社会への発信◎田口 均
- ・研究所のこれからを考える◎渡邊 博

〈山崎（記念）農業賞受賞者はいま〉

- ・丸藤政吉〈第5回・1979年〉現場と共に＝「農村通信」創刊800号
- ・小林芳正〈第8回・1982年〉ふるさとへの想い—いまも消えることなく
- ・古野隆雄・久美子〈第21回・1996年〉合鴨家族の20年
——進化し続ける合鴨水稲同時作
- ・鋸谷 茂〈第29回・2004年〉自然の摂理に基づいた林業技術を現場で実践
- ・榎本牧場〈第30回・2005年〉都市近郊で酪農の6次化をさらに展開
- ・大張物産センターなんでもや〈第32回・2007年〉
地区民が求める「なんでもや」であり続けること
- ・野口種苗研究所・野口 勲〈第33回・2008年〉
自然回帰の時代のなかで固定種の普及につとめる
- ・NPO 法人 福島県有機農業ネットワーク〈第36回・2012年〉
福島の有機農業再興のために

■第147 定例研究会 愛郷 vs 愛国— TPP 問題へのもう一つの視座◎宇根 豊
〈書評〉宇根 豊 著『百姓学宣言』／徳永光俊

〈編集後記〉 汚れた民主主義と多数派の横暴にどう抗するか

民主主義とは正しい者が勝つ制度ではなく、多数が勝つ制度でしかなかった。しかも多数派になる手段は正しさではなく利益だった。人々が思い描く純粋な民主主義は、現実の場面をくぐり抜けると、つねに汚れた民主主義と多数派の横暴へと姿を変える。

——これがわたしの書いたものであるならば、おおいに格好がよいのだが、残念ながらそうではない。内山節著『戦後思想の旅から』（有斐閣、1992年）からの引用である。

この一節は、安保闘争当時の政治状況をうけて書かれているのだが、けっして過去のものとは感じられない。わたしたちのまわりには、原発再稼働、TPP、特定機密保護法、憲法解釈の変更などの問題があり、「多数派」によって悲惨な状況になりかねないのだから。

近代的人間を特徴付けるのは「個人主義、合理主義、発達主義、科学主義」の

4つであると内山さんは本書で言っている。原発再稼働や TPP のみならず、「自己責任」や「経済合理主義」、「成長戦略」などの背景にあるのはこうした精神ではないか。とともに、このような精神は政治家でもなく財界人でもないわたしたちにとっても多かれ少なかれ血肉化してしまっている。それはつまり、「多数派」を批判する側も、その精神的土台を相当程度共有しているということでもある。

そうした今日において、どこに希望の芽をみいだせばよいのか。先日聞いた講演（10/30）で内山さんは、さまざまな関係をつなぎ直していこう、元のかたちに戻せるものは戻していこう、と述べている。これは、命とは個体のなかではなく、その人がとりむすんでいる関係のなかにある、という発言につづいてのものなのだが、いまという時代を生きるわたしたちの指針、あたらしい抵抗のかたちに繋がると言えないだろうか。

追記

『戦後思想の旅から』は今秋、「内山節著作集」の1冊（第8巻）として刊行（復刊）される。

<http://shop.ruralnet.or.jp/upload/conts/fair/images/54C14032.pdf>

2014年11月06日

山崎農業研究所会員・田口 均

yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売

『自給再考——グローバリゼーションの次は何か』

（発売：2008/11 定価：1,575円）

http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/

たくさんのお書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん（文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授）

グローバルの次は何？ ～卒業するゼミ生諸君へ

<http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html>

◎戒谷徹也さん（大地を守る会）

ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”

「自給率」の前に、「自給」の意味を

<http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/>

◎吉田太郎さん（長野県農業大学校教授、執筆者）

キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました

http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182

◎関良基さん（拓殖大学政経学部）

ブログ：代替案 書評：『自給再考 ―グローバル化の次は何か』

<http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0>

◎大内正伸さん（イラストレーター・ライター）

ブログ：神流アトリエ日記（3）「書評『自給再考』」

<http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive>

◎ブログ：本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か

<http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html>

◎森川辰夫さん

NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報

<http://www.rircl.jp/shiryo.htm>

◎日本農業新聞／書評

（2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優）

<http://yamazaki-i.org/>

（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）

◎小谷敏さん（大妻女子大学）

日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ（2009/01/31）

<http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219>

◎白崎一裕さん（(株) 共に生きるために）

月刊とちぎV ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫

<http://yamazaki-i.org/>

（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）

◎塩見直紀さん（半農半X 研究所、執筆者）

ブログ：半農半Xという生き方～スローレボリューションでいこう！

立国集。

<http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/>

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
- 5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回 372 号の締め切りは 11 月 17 日、発行は 11 月 20 日の予定です。

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 371 号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://archive.mag2.com/0000014872/index.html>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

<http://www.yamazaki-i.org>

2014.11.06（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:yamazaki@yamazaki-i.org>

***** ここまで『電子耕』 *****